

# 国語

## 注 意

1. 問題は全部で15ページである。
2. 解答用紙に氏名を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	----------------------------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「私の死」は、そもそもそれ自体が成立しない。第一人称単数の所有格としての死を、われわれは持つことができない。第一人称の死は、決して体験されたことのない、未知の何ものかである。論理的に知りえないものである。知りえないものに対して恐怖はどういう形を取るのか。もちろん、死への恐怖と呼ばれるものの中には、苦しみへの恐怖、痛みへの恐怖が含まれていることはたしかである。それは死への恐怖というよりは、死に臨んだある苦痛の状態としての生への恐怖である。

死に勝る苦しみ、という表現がある。では死は苦しみの極限としてあるのか。そうではあるまい。苦しむのは生である。苦しみは生きていることの一つの証である。生の状態である。死が生の終わりなら、死は苦しみの終わりでもある。しかし、繰り返しですが、私という第一人称にとって、死は、完璧な未知である。本当に死は苦しみの終わりなのかどうか、それを言うことさえ不可能なものとして、死はある。

したがって、いわゆる死への恐怖は、苦しむ生への恐怖を含んでいるにせよ、それだけではあるまい。

生への盲目的な執着が、ヒトが生物であることの明証であるとすれば、死への恐怖はヒトが人間であることの明証であると言えぬだろうか。

これを消極的な面から考えてみよう。第三人称の死は、私にとって、消滅であり、消失であった。したがって、それは、本当の意味での「死」ではない。自分の前に立ちほだかる未知の深淵としての死の何たるかを知ろうとする、むなしい努力のための、何らの糧にもならない。自分の万年筆やハンカチや財布をいくら紛失したとしても、それで自分の死について何か感ずるところがあったとは言えまい。

そして、第一人称の死、つねに未来形でしかありえないものが、現実化したとき、「私」は、誰からも手助けを受けることなく、完全な孤絶のなかで、それを体験することになる。第三人称の死が、「私」にとって消滅であるならば、第三者にとって「私」の死は同じように単なる消滅以外のものではありえないだろう。「私」にとって一度も体験したことのない「私の死」を、私は、自

分以外の一切の他に対して架すべき何らの橋きょうもないままに、絶対の孤のうちに、引き受けなければならない。

このとき、それまで陳腐ちんぷだった第三人称の死の一つずつが、もしかして自分がこれから引き受けようとしている死の先達として、意味をもってくるように思われるかもしれないにせよ、もとよりそれは、クウンあな期待に過ぎない。

この「私」の死のもつ徹底的孤絶さのゆえに、人は、迎えるべき死への恐怖を増幅された形で感ずる。日常的世界のなかでは、つねに人間として、人どうしの間の関係性のなかで生きてきたわれわれは、

A 絶海の孤島に独りあつてさえ自然のな

かに友をつくり人間の生活の回復への微かな期待を決して捨てることのないわれわれは、死において、かかる一切の人間としての関係性を喪つて、ただ一人で、死を引き受けなければならぬ。このことへの恐怖こそ、逆説的に、人が人間として生きてきたことへの明証となるだろう。あえて、「消極的」と呼んだのは、この逆説性のゆえである。

他方、このような死への恐怖は、積極的な意味でも、人の人間たることの明証の一つたりうると言えよう。それには、第二人称が介在することになる。

B、人が自らの究極的孤絶性を肌膚きふに烙印のごとく自覚するのは、死を迎えることにおいて最も著しい。しかしその

孤絶性を知性によって理解することは、むしろたやすい。とりわけデカルト以来の西欧近代思想の洗礼を受けたものにとつてはそうである。そして現実の世界における「人間」性、つまり人が人と人との間の関係性のなかで生きていることと、表層的に理解された人の孤絶性との矛盾を乗り越えるために、われわれはさまざまな方法を案出して、孤絶した人と人との間に、何らかの架橋を施さんとするのである。

しかし、知性において理解された人間の孤絶性は、むしろある立場からすれば誤っていると云えるのかもしれない。

例えば、私は「私」として外界から隔絶されているかのように思われるが、私の身体さえ楽器や楽弓のように、あたかも拡大されたかのように感じられることがある。車を運転する熟練したドライバーは、車の外壁をあたかも自らの身体と同じように感じる。他方、人間は自己によって自らの身体を支配・制御しているかのようにサッカクいしているが、実は、自らの身体的支配はつねに他者のモホウうによって獲得される、という事実を忘れることはできない。高校生の時、私は鉄棒の蹴上けあがりがどうしてもでき

なかった。ところがあるとき私の前に何人かの人びとが、次々に蹴上りを演じてみせた。何の気なく次に鉄棒に下った私は、それまで演じた人びとと全く同じことをして、何ということもなく、何らの自覚もなしで、鉄棒の上に乗ってしまった。このとき「われわれ」が「私」を造りあげていた、<sup>d</sup>という言い方が許されるだろう。

このような状況は、幼児においてもつとはつきりしている。幼児にとつて、母親と自分の区別ははつきりしていない。ある程度の年齢に達すると母親は子供に自分を「僕」と呼ばせるようになる。年齢が早すぎると「僕」という呼称は「僕」を指さないで終わってしまう。母親がそう呼ぶから僕は「僕」であるに過ぎない。母親さえ、ときに「僕、そんなことしちゃだめじゃない」などと言ふ。この時、母親と「僕」とは、まだ分離しない。「われわれ」意識で連なっている。幼児は、次第にそうした言わば前個我的な状況から、母親からの反射の光によって、「僕」を僕として捉えるようになり、それと反射的に母親を第二人称的他者として捉えるようになる。前個我的「われわれ」状況は、第一人称と第二人称の他者どうしに分極化すると言つてよからう。つまり主体の集合体としての「われわれ」は、前個我的「われわれ」状況のある変型として考えるべきではないか。

愛し合う二人の没我的<sup>(え)</sup>ホウヨウは、かつての自らを育てた前個我的「われわれ」状況のある形で回復を指向する、一瞬の回復ではないか。

この観点から見ると、個我的孤絶性は、少なくとも生にある限り、むしろ、抽象的構成に近いものと言ふべきである。それゆえにこそ、第一人称が迎えんとする死こそ、人間にとつて極限の孤絶性、仮借なき絶望の孤在を照射する唯一つのものなのかもしれない。

(村上陽一郎『死と生への限差』より)

問一 傍線部 a「第一人称の死、つねに未来形でしかありえないもの」とあるが、どういうことか。最適な説明を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

① 前個我的状況にある「われわれ」という第一人称を考えたとき、「われわれ」が同時に死ぬという状況が、現在生じることが考えにくい。

② 第一人称は、聞き手を想定している人称であるが、主体が死んでしまえば、どのような聞き手にも話しかけることはできない。

③ 自分自身の死は、生きている自己にとっては、永久に体験することのできない絶対的な未知として存在するものなのである。

④ 現在話をしている主体は生きている以上、死んだという体験を話すことは不可能である。それは未来においてしか話すことができない。

⑤ 第一人称の死を、われわれは体験することができないので、常に未来の状態を現在であるかのように語らなければならないのである。

問二 傍線部 b「陳腐だった第三人称の死」とあるが、なぜ「陳腐」なのか。最適な説明を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

① 他者の死は、未知の深淵としての自分の死について何の示唆も与えてはくれず、単なる消滅・消失に過ぎないから。

② 第三人称は全くの他人を指しており、他人の死は万年筆などを紛失した場合と同じで、死と呼ぶことはできないから。

③ 普通、見ず知らずの人が死んでも、さほど悲しみは生じず、ただ違和感のようなものが感じられるだけであるから。

④ 第三者にとって「私」の死は単なる消滅以外のものではありえず、それゆえ第三者の死は私にとっても滑稽となるから。

⑤ 第三者の死は、常に大きな悲しみをもたらすが、それが必ずしも自分自身の死と結びつかない場合も多いから。

問三 空欄 A に入る表現として、最適なものをお次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① どうせ                      ② たとえ                      ③ しばしば                      ④ かしながら                      ⑤ いつも

問四 傍線部 c「この逆説性」とあるが、どういふことか。最適な説明をお次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

号は 4。

① 人はいつも一人で生きているように見えるが、いつでも大勢の人に支えられて生きていることを、誰もが最終的には悟るのだということ。

② 人は孤独の中に死ぬように見えるが、実際には多くの人に見守られて死ぬのであり、まさにその真実が他者との絆を示しているということ。

③ 徹底的な孤独の中で一人死なねばならぬことへの恐怖が、かえって人が他者との関係性の中で生きてきたことを示しているということ。

④ 死への恐怖はさまざまなことを教訓として教えてくれるが、もし実際に死んでしまったら、どんな教訓でも何の役にも立たないということ。

⑤ ただ一人で死を引き受けるという決意こそが、人びとと深くつながりあう契機を生むのであり、人の存在意義がそこに生まれるということ。

問五 空欄 B に入る表現として、最適なものをお次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 5。

- ① 一般に                      ② その場合                      ③ かしながら                      ④ 次の問題は                      ⑤ 稀な例ながら

問六 傍線部d「われわれ」が「私」を造りあげていた」とあるが、その最適な説明を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

① もし他者がいなければ真似をすることができず、筆者は永遠に鉄棒ができなかつただらうと考えると、他者の重要性が明らかになるということ。

② 人間にとって極限の孤絶性、仮借なき絶望の孤在を照射する唯一つのものとしての死が、私の人格形成を促していたとらうこと。

③ 前個我的状況にある「われわれ」という第一人称が、あらゆる場合において、自己の成長には必要不可欠であるということ。

④ 教育の基本は真似をすることにあり、体育の授業も集団で真似ることに重点が置かれており、生徒たちが体の統御を学んでいくということ。

⑤ 人間が自己の身体を統御することは、他者との関係性の中で他者を真似ることによって初めて可能となるのだということ。

問七 筆者の主張の説明として、最も不適切であると思われる説明を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 私は「私」として外界から隔絶されているかのように思われるが、私の身体があたかも外界へ拡大されたかのように感じられることがある。
- ② 主体の集合体としての「われわれ」は、前個我的「われわれ」状況のある種の変型として考えることができるであろう。
- ③ 愛し合う二人が没我的に愛し合うことは、かつて自らを育ててきた前個我的「われわれ」状況を永遠的に回復させようとする試みであろう。
- ④ 他者との前個我的な関係性を希求しつつ営まれる生を前提として考える限り、個我の孤絶性は知的に構成された抽象的なものにとどまる。
- ⑤ 個我の極限的孤絶性は、他者との関係性を断ち切って自分だけを襲う死において、初めて具体的現実性を帯びたものとして立ちあらわれてくる。



問八 二重傍線部(あ)～(え)のカタカナに相当する最適な漢字を次の各群の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番

号は順に 8 9 10 11。

(あ) クウソ

- ① 空 疏 8
- ② 空 素
- ③ 空 疎
- ④ 控 疏
- ⑤ 控 組 8

(い) サツカク

- ① 錯 角 9
- ② 索 角
- ③ 搾 角
- ④ 錯 覚
- ⑤ 裂 攪 9

(う) モホウ

- ① 模 放 10
- ② 模 倣
- ③ 膜 倣
- ④ 摸 放
- ⑤ 喪 放 10

(え) ホウヨウ

- ① 包 擁 11
- ② 法 要
- ③ 包 容
- ④ 逢 揺
- ⑤ 抱 擁 11

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

心の現実のイメージとして神話などを「研究」することは、極めて困難なことである。ここには二重の困難さがある。まず一般に「研究」と言う場合、研究者の W 要素をできるだけ抜きにして行なうことになっている。しかし、そのようなことになるとイメージのもつ生命力が消え失せてしまう。話を聴いたときの自分の心の動きを対象にいてこそ、イメージとしての研究が成立するはずなのである。次の問題は、現代において「心の現実」と言っても、その「心」を通常の意識とイコールであると考ええる人が多いからである。これらの人は、昔話の内容などはすべて「非現実」「異常」などの言葉によって片づけてしまうであろう。近代の自然科学を生み出した知識のみを、唯一の正しいものと考ええる態度では、イメージやコスモロジー(注1)の研究は不可能になる。

人間がこの世に生きてゆくためには、いろいろなことをしなくてはならない。自分を取り巻く環境のなかで、うまく生きてゆくためには、環境について多くのことを知り、その仕組みを知らねばならない。このために、自然科学の知が大きい役割を果たす。自然科学の知を得るために、人間は自分を対象から切り離して、客体を観察し、そこに多くの知識を得た。太陽を観察して、それが灼熱の球体であり、われわれの住んでいる地球は自転しつつ、その周りをまわっていることを知った。このような知識により、われわれは太陽の運行を説明できる。

このような自然科学の知は、「自分」を環境から切り離して得たものであるから、誰に対しても(あ)普遍的に通用する点で、大きい強みをもっている。自然科学の知はどこでも通用する。しかし、ここで一旦切り離れた自分を、全体のなかに入れ、自分という存在とのかかわりで考えてみるとどうなるか。なぜ、自分はこのような太陽の運行と関連する地球に住んでいるのか。自分は何のために生きているのか、などと考えはじめるとき、自然科学の知は役に立たない。それは、出発の最初から、自分を抜きにして得たものなのだから、当然のことである。太陽の動きや、はたらきは、自分と無関係に説明できる。しかし、他ならぬ自分という存在と、太陽とは、どうかかわるか。太陽と自分とのかかわりについて、確たる知を持つて生きている人たちについて、A

(注2) ユングは彼の自伝のなかで述べている(「ユング自伝Ⅱ」)。

ユングが旅をしてプエブロ<sup>(注3)</sup>・インディアンを訪ねて行ったときのことである。インディアンたちは、彼らの宗教的儀式や祈りによって、太陽が天空を運行するのを助けていると言っているのである。「われわれは世界の屋根に住んでいる人間なのだ。われわれは太陽の息子たち。そしてわれらの宗教によって、われわれは毎日、われらの父が天空を横切る手伝いをしていて。それはわれわれのためばかりでなく、全世界のためなんだ」とインディアン<sup>4</sup>の一人は語った。彼らは全世界のため、太陽の息子としての勤めを果たしていると確信している。これに対して、ユングは次のように「自伝」のなかで述べている。

「そのとき、私は一人一人のインディアンにみられる、静かなたすまいと『気品』のようなものがなにに由来するのかが分かった。それは太陽の息子ということから生じてくる。彼の生活が宇宙論的意味を帯びているのは、彼が父なる太陽の、つまり生命全体の保護者の、日毎の出没を助けているからである」

インディアンたちは、彼らの「神話の知」を生きたこと<sup>5</sup>によって、ユングが羨望を禁じ得ない「気品」<sup>B</sup>をもって生きている。これに対して、近代人は何とせかせかと生きていることか。近代人は豊かな科学の知と、極めて貧困な精神とをもって生きている。ここで、インディアンたちが彼らの神話の知を、太陽の運行にかかわる「説明」として提出するとき、われわれはその幼稚さを笑いもの<sup>C</sup>にすることができ。しかし、それを、自分をも入れこんだ世界を、どうイメージするの<sup>4</sup>かという、コスモロジーとして論じるとき、われわれは笑ってばかりは居られない。

自然科学の知があまりに有効なので、近代人は誤って、コスモロジーをさえ近代科学の知のみに頼ろうとする。X<sup>(い)</sup>を犯してしまったのではなからうか。自然科学の知をそのまま自分に「適用」してコスモロジーをつくるなら、自分のヒ小さ、というよりは存在価値の無さに気落ちさせられるであろう。自分がいったい何をしたのか「計量可能」なものによって測定してみる。相当なことをしたと思う人でも、宇宙の広さに比べると無に等しいことを知るだろう。特に、死のことを考えると、それはますます無意味さを増してくる。

このあたりのことにうすうす気づいてくると、自分の存在価値を見出すために、安易な「神話」でもつくり出すより仕方がなく

なつて、「若いときには」自分はどうした、こうした、というような安価な「神話」を語つて、近所迷惑なことをする。あるいは、宗教家という人たちも、コスモロジーについて語るよりは、安易な道学者になつてしまふ。つまり、「よいこと」を、これほど沢山している、というくらいのことを誇りとしないと、自分の存在価値を示せないのである。

古来からある神話を、事象の「説明」であると考え、未開の時代の自然科学のように Y したため、神話や昔話などの価値を近代人はまったく否定してしまつた。

確かに自然科学によつて、自然をある程度支配できるようになつたが、それと同じ方法で、自分と世界とのかかわりを見ようとしたため、近代人はユングも指摘するように、貧しい生き方、セカセカした生き方をせざるを得なくなつたのである。もちろん、だからと言つてわれわれはすぐに、プエブロ・インディアンのコスモロジーをそのままいただくことはできない。われわれは既に多くのことを知りすぎている。われわれとしては、自分にふさわしいコスモロジーをつくりあげるべく各人が努力するより仕方がないのである。われわれは、<sup>(注4)</sup> エレンベルガーの表現を借りるなら、自分の無意識の神話産生機能（さんじょう）に頼らねばならない。しかし、そのことをするための一助として、古来からある神話や昔話を「Z」(3)「非合理的」ということで簡単にハイ斥するのではなく、その本来の目的に沿つた形で、その意義を見直してみることが必要であらう。

(河合隼雄『イメージの心理学』より)

(注)

- 1 コスモロジー…宇宙論。
- 2 ユング…スイスの精神医学者。分析心理学の創始者。
- 3 プエブロ・インディアン…北アメリカ南西部に居住し、農耕を営んできた先住民族の総称。
- 4 エレンベルガー…スイスの精神医学者。『無意識の発見』などの著書がある。

問一 空欄 W に入る言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12。

- ① 主観的
- ② 科学的
- ③ 集団的
- ④ 多極的
- ⑤ 神話的

問二 傍線部(あ)～(う)のカタカナは熟語の一部である。そこに当てはまる最適な漢字を含む文を、次の各群にある①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は順に 13 14 15。

(あ) フ遍的 13

- ① 事件にフ随して問題が起こる。
- ② それはフ朽の名作である。
- ③ 事実とよくフ合している。
- ④ 税金のフ担をもっと軽くする。
- ⑤ 携帯電話がフ及していく。

(い) ヒ小 14

- ① ヒ近な例を挙げて説明する。
- ② いつまでも罪状をヒ認し続ける。
- ③ ヒ凡な才能の持ち主である。
- ④ ヒ境への旅を企画する。
- ⑤ 安全な場所へヒ難する。

(う) ハイ斥 15

- ① 車のハイ気が空気を汚す。
- ② 三回戦でハイ退する。
- ③ 核兵器のハイ絶を訴える。
- ④ それはハイ信行為である。
- ⑤ 細かなハイ慮に欠ける。

問三 波線部1〜5に用いられている「知」を、その内容によってa、b二つのグループに分けるとすると、どのように分けたらよいか。その組合せとして最適なものを次の①〜⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 16。

① a 自然科学の知、確たる知、近代科学の知  
 b 神話の知、豊かな科学の知

② a 自然科学の知、豊かな科学の知、近代科学の知  
 b 確たる知、神話の知

③ a 自然科学の知、確たる知、豊かな科学の知  
 b 神話の知、近代科学の知

④ a 自然科学の知、近代科学の知  
 b 確たる知、神話の知、豊かな科学の知

⑤ a 自然科学の知、豊かな科学の知  
 b 確たる知、神話の知、近代科学の知

問四 傍線部A「生きている人たち」は、どのように生きている人たちか。その説明として最適なものを次の①〜⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 17。

- ① 自然科学の知識を無視して、自らを中心とする宇宙観によつてのみ行動している人たち。
- ② 固有の信仰を守ることによつて、宇宙における自己の役割を果たしていると信じている人たち。
- ③ 自分と自分を取りまく宇宙との関係を、実際は科学的にも説明ができる人たち。
- ④ 自らがなによりもこの宇宙の中心であると信じて疑わない生き方をしている人たち。
- ⑤ 自分という存在なしには宇宙はありえないと思ひこんで、常に自己を賛美している人たち。

問五 傍線部B「気品」とあるが、その気品は、何から生まれてくるとユングは考えているのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は **18**。

- ① 自分たちが宇宙全体の支えであり、この宇宙の中心であるという自負から。
- ② 自分たちは宗教的儀式や祈りを通じて世界に役立っているのだという確信から。
- ③ 自分たちは科学で解明できないものまでもすべて説明できるといふ誇りから。
- ④ 自分たちは宗教的儀式や祈りによって、太陽と完全に一体になっているといふ信仰から。
- ⑤ 自分たちが宇宙全体を支配しており、その頂点に立っているといふ自信から。

問六 傍線部C「それを、自分をも入れこんだ世界を、どうイメージするか」という、コスモロジーとして論じるとき、われわれは笑ってばかりは居られない」とあるが、なぜか。その理由として最適な説明を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は **19**。

- ① 「自然科学の知」に依存する社会を否定し、「神話の知」を母胎とした社会を肯定することになるから。
- ② 「自然科学の知」の非科学性が露呈し、「神話の知」の科学性が際立つことになるから。
- ③ 「自然科学の知」の万能性が崩壊し、「神話の知」の神秘性が新たな価値基準になるから。
- ④ 「自然科学の知」の科学性が希薄になり、「神話の知」の優位性を是認することになるから。
- ⑤ 「自然科学の知」の限界が意識され、「神話の知」の存在意義を再確認する必要があるから。

問七 空欄 **X** に入る言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は **20**。

- ① 罰
- ② 愚
- ③ 違反
- ④ 規則
- ⑤ 矛盾

問八 空欄 **Y** に入る言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は **21**。

- ① 精読
- ② 明察
- ③ 信頼
- ④ 誤解
- ⑤ 差配

問九 空欄

Z

に入る言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 22。

- ① 非日常的                      ② 非神話的                      ③ 非科学的                      ④ 非神秘的                      ⑤ 非原始的

問十 本文で筆者が述べている主張に合致する最適な説明を、次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は

23。

- ① 自然科学がいかに発達しても、広大無辺な宇宙を解明しつくすことはできない。その限界を打破するのはわれわれの生の証としての神話の知であり、それを解明してわれわれはじめて永遠性を獲得する。
- ② 人間存在の証を求める神話の知は、自然を客体化して発達した自然科学の知によって裏付けされてきた。これからはその客観性を一層深め、それを生命の意義の解明に生かしていく必要がある。
- ③ 自然科学の知は、人類に大きな貢献を果たしたが、その限界も見えはじめている。われわれは科学への依存を断念し、めいめいがその自然観を確立し、古代へと回帰しながら神話の知を再発見すべきである。
- ④ 近代の自然科学は、われわれに多くの恩恵と弊害をもたらした。その弊害を回避するために、われわれは古代の神話や昔話の世界をすべて復活させ、生命や宇宙の原初的な意味を探究しなければならない。
- ⑤ 人間存在の根源は、自然科学の方法だけでは把握しきれない。われわれは、神話や昔話に込められた人間の尊厳や価値についてあらためて考察し、めいめいの世界観を創造しなければならない。









